

第11回審議会の論点整理

小諸市学校改築・再編基本方針に基づく具体的な改築・再編計画策定についての意見を述べる視点から

1 基本的な考え方

学校施設の改築・再編は、未来に生きる小諸市の子ども達のために
教育の変化や多様な教育のニーズに対応できる教育を進めるため

児童生徒一人一人の学びを支える教育への転換

児童生徒を支えるのは学校職員、保護者、地域（市民）であることはもちろんであるが、求められる資質・能力（学力）は、子どもの心の育ち（非認知能力）、言語の育ち（言語能力）が子ども自身の学びを支え、資質・能力（学力）を伸ばす。

学びを支える力は年齢を重ねれば自ずと育まれていくものではない。意図的、継続的、計画的な取り組みが必要となる。

***新しい考え方が広がっていく可能性を全く考慮しないままでは、再編後の教育の常識と乖離しまう可能性もある。ある程度生徒が減少しても機器の活用や工夫で学びを補うスタンスを取り入れるのかどうかも考えたい。**

2 望ましい小学校の規模

「1学級の児童数が20～30人前後」 「1学年が少なくとも2～3学級以上」

- 1学年最低40人であること。 6学年では240人
一つの小学校の児童数最低240人以上が、将来に渡って確保されていること
- ただし、今後児童数が減少することを考えると、開校時3学級以上を目安にしたい。
1学年平均80人以上で3学級は安定して確保される。
(最大35人で1学級、2学級では70名 3学級最小人数は71名)
開校時、全校児童数480人以上であることが望ましい。
- 学校職員と行政サービスの集約
小規模校では一人の教師への負担が益々増大する。
(5学級 専科なし 6学級～13学級で専科1名 13学級～25学級で専科2名)
 - ・学年が複数になることで、教科分担、役割分担ができる。高学年で教科担任制、学年担任制を可能にする。(単級の学校は一人の教師への役割分担が増える)
 - ・市費支援教員、支援員を集約し、学年への支援を増やし、多様な教育的ニーズに対応がしやすい環境をつくる。複数担任制を可能にする。
 - ・英語教育、プログラミング教育への充実を可能にする。
- 市民参加による教育の推進
 - ・一人一人の学びを支える学習ボランティアを拡充し、きめ細かい支援を可能にする。

- ・教科、総合的な学習で社会的・職業的自立を図るキャリア教育を可能にする。
- ・部活動支援、通学路の安全確保を図る。

*学校教育を支える学校支援地域本部のような組織が必要となる。運営できる力を有するコーディネーターの育成が必要となるが。

*「これまで、本気になって学校を支えてきた。学校と地域の絆が出来つつある。学校が無くなれば絆が壊れる。」という心配な思いがあると思う。

これまで学校を支えていた地域の方々の思いが生きるように配慮したいが。

○ ICT機器集約と活用と充実

- ・ネット環境を充実させ、一人一人の言語能力の向上を図り、主体的対話的な学びを可能にする。
- ・だれもが自分の進歩の状況や課題に合わせて個別学習を進めることができることを可能にする。

3 小中学校の配置及び校区

小中一貫教育導入の是非

具体的にどの小学校をどのように再編するのか意見をまとめる。

再編に合わせて通学区の見直しをする。

9年間を通して連続的・系統的に教育を進めるカリキュラムをつくとともに、小学校・中学校間で一貫した計画性のあるカリキュラム・マネジメントを推進するためには、芦原中学校と小諸東中学校を学区とする併設型小学校・中学校の形態で小中一貫教育を推進することが望ましい。

小学校再編は併設型小学校・中学校の形態を実現することを念頭に置く。

*こんな教育、こんな学校という見える化 イメージをもつことが出来るようにする。

*「地域から学校が無くなるのは寂しい。」「子どもの声が聞こえなくなるのは寂しい。」という声もある。

地域の活気をなくさないようにすることも考慮したい。

*学区が広がることで通学への不安が出てくる。

*一貫教育を進めるなら小1校、中1校が理想だが。

*千曲小学校の保護者の声も聴きたい。

*市民の意見を聞き、市民合意を得て慎重に進めることが必要。時間をかけてもよい。

*学区の線をどこに引くか細かく検討が必要。特に野岸小学区。古城区は3校に通学区がまたがっている。